



作家が託した無言の願い

—『朽助のいる谷間』に見る井伏鱒二の真意—

広島文化学園大学看護学部
深川 賢 郎

■ はじめに

井伏鱒二の作品には、どことなく飄々としたユーモアがただよっている。『朽助のいる谷間』も同じような味わいを持っている。のどかな山村の物語である。けれども、丁寧に読んでいくと、それだけでは手放せない世界が読み手を捉えてくる。こんなことから『朽助のいる谷間』にこだわるようになった。表現の裏側や行間に、なんとなく見過ごせない訴えが見えてくるのである。これが文学作品のもつ「隠喩」の力なのだろうか。直接には表現されていないのに、著者の訴えが強く存在感を発揮している。

『朽助のいる谷間』は、井伏鱒二著『山椒魚』（新潮文庫）に収録されている短編の一つで、めったに話題にされることもない作品である。

■ 偽装された表現

井伏鱒二の文章について、中村 明（早稲田大学教授・当時）は、『日本語の文体』¹⁾において「屈折した詩情」という見出しのもとに、次のように述べている。

「井伏鱒二の愛読者となるには、ある資質と何がしかの年季が要る。それは、虚と実とのあわいを縫う書き方と、屈折した詩情の表現に波長を合わせ、そのはにかみの奥に作者の本音を聴き取らなければならないからだ」（p.356）。

同書には、さらに次のようなことも述べられている。概略紹介してみたい。

井伏鱒二が中学生であったころ、彼は、森鷗外の執筆する『大阪毎日新聞』の連載小説のなかに史実と異なる部分を見つけた。当時、旧制の福山中学校（現在の福山誠之館高等学校）において友人といっしょに発見したものであった。井伏は相談の上、史実との違いについて、鷗外に手紙を書いた。発見者は、「朽木三助」という偽名であった。

鷗外は、井伏の指摘の正しいことを認め、中学生の井伏に丁寧な返事を送ってきた。それを見た友人が、鷗外の手紙を欲しがった。そこで、もう一度鷗外から手紙を貰おうということになり、井伏は、鷗外に再度手紙を書いた。その際、井伏は「虚構」を企てている。それは、「朽木三助氏は博士（鷗外）の返事が着くと間もなく逝去された」という内容であった。「朽木」という人物は実在していない。鷗外は、朽木の死去について哀悼の意を告げるべく手紙を書いてよこした。こうして、井伏と彼の友人は、鷗外から二通目の手紙を手にすることができた。

このことについて中村 明は「事実と虚構をないまぜることで鷗外にまんまと一杯くわせた物書き井伏鱒二の誕生であった」（p.350）と述べている。

さらに、中村 明は、井伏鱒二の文体を「はにかみ」のフィクションと認めている。これには若干の疑義を感じる。言いたいことをあからさまにいえぬことは、「はにかみ」かもしれない。しかし、井伏の

ふかがわ けんろう

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学看護学部

文体は、むしろ、カムフラージュ（camouflage・迷彩・偽装）の文体と言った方がふさわしいように考えられる。

『朽助のいる谷間』は、じっくり読んでみると、表の意味と、その裏に託されている別の意味が匂って来る。偽装された表面の物語の裏に、文学特有の隠喩が用いられているのではないか。この隠喩で「偽装」された、謎めいた文体の背後には、井伏文学の「時代」に対する深刻な訴えが託されているように思えるのである。

『朽助のいる谷間』と『山椒魚』とは、短期間のうちに前後して発表された作品である。この二つの作品には、「時代」を論じる、共通した趣旨がうかがえる。そこで、折に触れて『山椒魚』にも目を向けながら『朽助のいる谷間』に込められた真意を探ってみたい。

■ 『朽助のいる谷間』の梗概

主人公「谷本朽助」は、若いころ、ハワイにわたって農業に従事した。けれども、成果を上げることができず、現地でも妻とも死別している。二人の間には娘がいた。娘は大きくなってアメリカ人と結婚し、一女（タエト）をもうけた。その後、朽助は帰国する。結婚していた娘の夫は幼いタエトを残してアメリカ本土に帰った。朽助の娘は自分の生んだ娘のタエトを伴って日本に帰る。帰国後、間もなくタエトの母は再婚する。しかし、結婚後一か月くらいして亡くなる。朽助は、タエトを引き取り、一緒に暮らすことになる。

朽助が日本に帰って、働いたのは、とある地主の家であった。彼は、地主の家の「山番」となった。そのかたわら、地主の家の三人の子どもたちの子守もした。後には、英語を活用して男の子の家庭教師もした。朽助は、特に一人の男の子を可愛がった。その子が東京の学校に出てからも、山からとれる茸などを送って、特別にひいきにしていた。その子が後に「文学青年」となり「私」という人物となる。

朽助は、タエトと二人で「しぐれ谷」に棲んでいた。おりしも、しぐれ谷を流れる小川をせき止めて堤防を作る話が出た。計画では、周囲が二里半（約十キロ）におよぶ灌漑のための溜池をつくるという。朽助の家は谷底にある。池ができると、住みなれた「生活の場」を池の底に沈められてしまう。朽助は、堤防建設の反対運動に走った。

タエトは、東京の「私」に手紙を書いて、朽助の願いを放棄させるよう説得してほしいと依頼した。朽助の反対闘争は、その時点において、すでに実を結ぶ見込みがなかったのである。堤防建設の工事は着々と進められており、いまさら反対する村人もいなかった。しかも、この工事は国家が認めた大事業であった。

「私」は朽助の闘争を放棄させるために帰郷し、住まいの立ち退きに同意するよう説得した。朽助は「私」の言葉に素直に従う。が、その心底には、諦めきれない不満や未練が尾を曳いている。池に水がたまっていくと、谷底に一軒だけ残されていた朽助の家は、洪水に巻き込まれるように水に沈んだ。それを見て朽助は、すっかり力を落として、立ち上がろうとしなかった。

■ 研究書等に見られる解釈

(1) 『井伏鱒二と常民』について

磯貝英雄編『井伏鱒二研究』（溪水社、1979）のなかに、『朽助のいる谷間』に関する論考『井伏鱒二と常民』がある。著者は横山信幸（愛知教育大学助教授、当時）である。内容は『山椒魚』の分析から始められている。以下、その論考の一部を取り上げて考察してみたい。

*以下、（ ）内は、引用者の言葉。

横山は、上記の論考において、『山椒魚』の、主人公の姿勢を井伏鱒二の人間性として読み取っている。それによると、「彼（山椒魚）は彼の棲家である岩屋から外へ出てみようとしたのであるが、頭が出口につかへて外に出ることができなかったのである」の一文を取り上げ、ここに著者井伏鱒二の姿勢が現れているとして次のように解釈している。

「〈岩屋〉はもちろん〈現実〉の譬えである。井伏氏は〈現実〉をいかにしても突き破れぬ堅固なもの、あるいは自分の力のおよばぬものとしてみていたに違いない……。この現実を自分ではどうすることもできない〈岩屋〉みたいなものだと認識するにいたった過程を私たちは知らない。……井伏氏にできることといえば岩屋の中の山椒魚のごとく嘆息したり、すすり泣いたりすることである……」(論考 p.76)。

ここには、弱くて女々しい井伏鱒二像が受け止められている。さらに、『朽助のいる谷間』については、次のような指摘がなされている。

「知識人として、あるいは井伏氏の分身としての「私」(東京の文学青年)は、山椒魚や朽助に対して彼らの悲しみを理解するという以上には、どのようにもかかわってはいないのである。「私」は、単に常民の世界を覗きこむために井伏氏によって設定された「のぞき窓」に他ならないのである。これが「私」の限界であり、また井伏氏の作品の登場人物が織りなすドラマの限界であろうと考えられる」(同上 p.86)。

このように横山は、『朽助のいる谷間』の登場人物である「私」(東京の青年)の姿勢について、その限界を指摘し、井伏作品の「ドラマの限界であろう」と結んでいる。

横山が注目したのは、朽助の孫娘タエトであった。

「彼女は嘆息したり自暴自棄になっている朽助とちがって、自分たちのおかれている状況をはっきりとつかんでいる。そしてこれにどう対処しなければならないかということもしっかりと心得ている。……不幸のどん底にある老人に対して「私」の執った態度と言え、<私は疲労を覚えていたので、しばらく立ち上がりたくないと思った>ということではなかった」(論考 p.86)

* < >内は、作品の引用部分を指す。

ここには、井伏鱒二の描く登場人物として「しっかりもののタエト」と、弱々しい「私(文学青年)」が指摘されている。この「私」というのは井伏鱒二の「分身」とされている。井伏鱒二という作家は、それほど“ひ弱な人物”であったのだろうか。

さらに考えてみたいことは、論考に大切な点が論じられていないということである。

横山は、『山椒魚』の〈岩屋〉は〈現実〉であるとしながら、〈現実〉が何を意味しているのか、については触れられていない。それどころか「〈岩屋〉みたいなものだと認識するにいたった過程を私たちは知らない」(論考 p.76)と切って捨てている。

また、朽助の課題となっている「堤防の建設=池の底に自分の家が沈むこと」という〈現実〉の持っている意味についても踏み込んで論じられていない。

この二つの〈現実〉が何を物語っているのか、この点に考察の眼が向けられなければ、これらの作品に託されている井伏の問題意識を明らかにすることはできないだろう。

(2) 『井伏鱒二研究』の「総論」について

上記で紹介している磯貝英雄編『井伏鱒二研究』の第I章「総論」において、この書全体の編者である磯貝英雄(広島大学文学部教授、当時)は、つぎのことを指摘している。

「日本の作家は、その文学活動の根底にある原体験に行き着くことができる。しかし、井伏文学をたどってそれを見いだすことはむずかしい。かれは、自分のドラマを決して手掛けないからである。……私を書かない私小説家という、奇妙なパラドックスがここに成立している」(『研究』 p.10)。

「さらに、……かれの作品には、環境をこえて自己を貫いてゆく、あざやかな個性といった存在はほとんど登場しない」(同上 p.11)

このように「総論」において、井伏作品のもつ問題点が二点指摘されている。一つは、井伏鱒二は「私を書かない私小説家」ということ。いま一つは「自己を貫いてゆく、あざやかな個性」が描かれていない、という点である。先に取り上げた横山信幸と同じように、ここにも個性の弱々しい井伏鱒二像が指摘されている。

ここで注目したいことは、井伏鱒二が昭和の初期において、なぜ、この二つの作品を書かなければならなかったのか、ということにある。その時代的背景を考察しないと、これらの作品に託された井伏の

深い意味は解明されないだろう。

(3) 作品の時代背景

石川啄木が『時代閉塞の現状』を書いたのは、明治43年6月のことである。啄木は、詩や短歌に励みながらも、幸徳秋水やクロボトキンなどの新しい思想に学び、社会主義に接近していた。そんな時代の風潮の中において「大逆事件」が生じた。

「大逆事件」は、明治43年5月25日、信州において宮下大吉ら5名のものが、爆発物所持の疑いで検挙された事件である。取り調べの中で、明治天皇の暗殺を企てていたということが発覚し、大逆罪として厳格な捜査が行われた。

この事件の捜査は入念で、執拗を極めた。体制はこのことをきっかけとして、先の5名を含む26名の逮捕者を出した。このことは、後に「弾圧事件」と呼ばれることとなる。その時の逮捕者のうちには、当時の社会主義運動の中心にいた幸徳秋水とその同志、あるいは思想家も含まれている。裁判は非公開で、迅速であった。その結果、死刑の執行は一週間足らずで実施された。死刑に処された者は12名、その他の多くは終身刑となった。

一連の逮捕、裁判、処刑の経過については、冤罪の疑いもあり、のちに学者たちの反論や一般市民の憶測も飛び交った。爆発物と直接関係しない社会主義者、アナキスト（無政府主義者）などが検挙されたのである。事件の捜査、裁判、刑の執行にいたる経過は、すべて政府主導によって執り行われた。「大逆事件」以後、思想家や作家たちの活動は閉塞し、冬の時代に入った。しかし、非合法とみられる活動は地下に潜り、動いていた。

(4) 井伏鱒二をとりまく状況

ここで井伏鱒二と彼をとりまく状況などをたどってみたい。（年齢は井伏鱒二のもの）

大正6年（19歳）、早稲田大学予科1年に編入学。

大正8年（21歳）、『山椒魚』の前身となる『幽閉』の原稿が生まれる。早稲田大学仏文科に入学したころであった。

大正10年（23歳）、プロレタリア（無産者・賃金労働者）文学運動が起きる。

大正12年（25歳）、『山椒魚』の前身である『幽閉』が同人誌に発表される。この年、関東大震災が起これ、治安の悪化とともに不景気が始まる。この前後から、天皇を中心とする国家体制は強化されて、天皇の神格化が進んだ。全国の義務教育学校には、校地内に「奉安殿」が建設され、その中には天皇の御真影（写真）と「教育勅語」が納められた。この仕組みは、昭和20年の終戦まで続き、終戦とともに廃止となる。

大正14年（27歳）、「治安維持法」（国体の変革、私有財産制度の否認を目的とする結社活動、個人行為に対する罰則）の制定。言論・思想の自由の束縛が強化される。

昭和3年（30歳）、内務省に「特別高等警察」（思想犯罪に対処するための警察、社会運動の弾圧などを担当する部署）が創設される。いわゆる「特高」とよばれて恐れられた。

昭和4年（31歳）3月、『朽助のいる谷間』を発表する。5月、『幽閉』を改作し、題名も『山椒魚』と改めて発表する。この年、プロレタリア文学運動の小林多喜二が『蟹工船』を発表する。

井伏が『幽閉』の構想を抱いてから、『山椒魚』として発表されるまで10年が経過している。この間、時代の推移とともに井伏鱒二の思想は熟成し、深化したと考えられる。

(5) 文芸評論家の見方

川盛好蔵によると「大正12年の関東大震災を境にして左翼文学が台頭し始め、大正末年から昭和初期にかけてその旋風は文壇を吹きまくった」（井伏鱒二、人と文学—『山椒魚』新潮文庫の解説）。この文章の後ろに、川盛好蔵は、井伏鱒二の文章を引用し、彼の文藝活動に関する姿勢を次のように紹介している。

「私（井伏）が左翼的な作品を書かなかったのは、時流に対してふてくされていたためではない。不

器用なくせに気無精だから、イデオロギーのある作品は書こうにも書けるはずがなかったのだ。』（『鶏肋集』）

井伏鱒二の当時について、随筆『鶏肋集』（『井伏鱒二全集』第六卷、筑摩書房編、1997）によると、さらに次のような事柄を見ることができる。

（早稲田大学の）「同人諸君は、私にも左傾するやうに極力うながして、たびたび最後の談判だといって私の下宿に直接談判に来た。しかし、私は言を左右して、左傾することを拒み、『戦闘文学』が発刊される前に脱退した」……「私は、左傾することなしに作家としての道をつけたいと思っていた」（『鶏肋集』 p.47）

ちなみに『戦闘文学』は、早稲田大学の同人誌の名称で、この名称は、『陣痛時代』→『戦闘文学』→『戦記』と変更されている。同人の左傾化を深めたための変化であろうか。同人たちは井伏鱒二を強く勧誘していた。しかし、井伏はこの同人から抜けたのである。

（6）自分を貫いた井伏鱒二

井伏鱒二は、自分の在るべき姿を模索しながら、自らの望ましい姿勢を堅持する生き方を守った。山椒魚と同じように、彼は孤独だった。しかし、政治の動向や仲間に対して、そのどちらにも彼は迎合しなかった。井伏は、自分のことを「不器用なくせに気無精だから」（『鶏肋集』 p.48）と書いているけれども、この言葉は、にわかには信じ難い。彼の中にある「虚」と「実」の使いわけの手腕を忘れてはならないだろう。

石川啄木が明治の末期に、いみじくも書いているように、「閉塞の時代」は、むしろ強化されていたのである。大正の末期から昭和の初頭において、自由を求める社会の空気は束縛され、閉塞は強化の道をたどった時代であった。そんな中で、『朽助のいる谷間』や『山椒魚』の構想は温められ、練り上げられていったのである。

昭和初期の不景気の中で、文壇ではプロレタリア文学運動が活発になる。それにともなって、国家の弾圧も熾烈になって行った。小林多喜二は、この弾圧にもかかわらず、プロレタリア文学運動に突き進んだ。昭和4年、『蟹工船』を発表。作品では、蟹工船のなかの過酷な弾圧と、それに抵抗する未組織の労働者の姿を描いた。この作品がきっかけとなって彼は逮捕され、思想の転向を要求された。

その間、小林多喜二は烈しい取り調べを受けた。それは言葉による追求ではなく、力による拷問であった。昭和8年2月10日、多喜二は烈しい拷問の結果、内臓は碎かれ、肛門と尿道から血を流しながら死んでいった。これと前後して多くの思想家や左傾化した作家が「転向」していったのである。

井伏鱒二は、それまでの姿勢を変えることはなかった。「左翼文学運動の嵐がふきまわっているさ中にも、彼はほんのわずかに向きを変えたかに見える程度で、それほど風の真っ向から受けることはなかった」（日本文学小辞典、新潮社）。

井伏鱒二は、当時の国家体制に対する直接の批判をしていない。労働者階級の貧困や解放運動に対する同調などの姿勢を取らなかった。彼は、一貫して自分の流儀を貫いた。

文芸評論家の亀井勝一郎は、『山椒魚』（新潮文庫の解説）で次のことを述べている。

「ユーモアは井伏さんにとって、二様に用いられる武器である。温かい愛情の所作であるが、また、人を手厳しく叱責する復讐の所作でもある。文学は善意の彼岸に遊ぶものだ。宗教では超越への祈念となるところを、井伏さんは俗にあるまま、俗に対する懐かしさと哀しさの同時的発想に基づく諧謔の裡に彼岸を形成するのである」（p.266）。

ここでいう「彼岸」とは、「物語」である。「温かい愛情の所作」は、作品に見られる人物たちのユーモアと見かけの上でのゆとりであろう。「人を手厳しく叱責する復讐の所作」という言葉には、井伏鱒二の文章のもつ真骨頂が指摘されている。この言葉には、作品の背景に託されている反骨精神が明快に指し示されている。亀井勝一郎のいう「諧謔」は、「滑稽」の意味であるが、これこそが「人を手厳しく叱責する復讐の所作」であり攻撃の「武器」とも言っている。同時に、「ユーモア」の裏に「彼岸を形成する」という。井伏鱒二の本音が作品となっているということであろう。言い得て妙（至言）である。

このような視点から、山椒魚の当惑や朽助の嘆きの言葉を読むと、その後ろには、井伏鱒二の時代に

対する烈しい嫌悪と憤りが浮かび上がってくる。

■ 『朽助のいる谷間』の解釈

これまで見てきたことをもとにして、『朽助のいる谷間』の要点を絞って、いくつかの場面を取り上げ、解釈を試みてみたい。

- 1 『山椒魚』の「岩屋」は、明らかに時局を反映した言葉といえる。石川啄木のとなえた「時代閉塞」という言葉などから影響された概念であろう。自由を奪われた強い束縛や弾圧を思わせる。『朽助のいる谷間』の「堤防」は、『山椒魚』の「岩屋」と同じように、自然のままの谷川と人々の棲家を「池」の底に封じ込める圧力の暗喩であろう。「堤防」は、朽助の「心の居場所」と「のびやかな自由」を阻害する障害物である。さらに言うならば、時の政府の狙っている「言論の弾圧」、「自由な思想の抑圧」であろう。

かつて小川の深みには、ねむの花が散って渦を巻き、花びらは川面に美しい軌跡を描いて流れていた。それは、住民の心を和ませる「自由」と「平和」の象徴だった。

- 2 谷川がせき止められて、川は窒息する。池の水面下に沈む周辺の傾斜地の木々は、すべて伐採された。切り倒された樹木とは、文芸を愛する者や思想家たちではないのか。彼らの活動が切り倒され、阻止される姿を示しているのではないか。伐採のとき、樹木の種類によって斧のたてる音が違う、と書かれている。耳ざとい朽助は、切り倒される音で樹木の種類を聞き分けている。この音は、作家や思想家たちの訴える一人ひとりの主張や怨嗟の声であったと思われる。
- 3 切り倒され、枝を払われて丸太にされた樹木は、川に放り込まれて流されていく。この情景は、「転向」によって、信念を奪われた人たちの姿であろう。彼らは、根こぎにされて信念や思想の根も枝も切り取られ、時代の流れに飲み込まれていったのである。
- 4 山の上にあった特別大きな岩は、ダイナマイトによって爆破された。岩は割れて木々をなぎ倒しながら谷底に落ちた。二つに割れた岩は、永久に池の底に沈んだ。この岩とは、時の政治家たちにとって、格別危険で見過ごせない人物の存在であろう。社会主義運動のリーダーであった幸徳秋水や左傾化した活動家、あるいは作家たちではなかったのか。
- 5 タエトは、アメリカ人の父と日本人の母との間に生まれたハーフである。彼女には、日本人とは異質の考え方が流れていた。それは、アメリカから持ち帰った民主主義の考え方であろう。朽助は、タエトを理解しており、タエトを愛してもいる。しかし、現状では日本の社会に通用しない生き方であることも知っている。

このように読むと、タエトは、女性というよりもイデオロギーの擬人化された姿であったと思われる。朽助のなかに棲んでいる密かな願望であったのかもしれない。

- 6 井伏鱒二は、この作品において、高度な「擬態」を演じている。先に引用した亀井勝一郎の言葉で言う「擲揄」（からかい）である。

すでに述べたように、井伏鱒二が旧制中学校の生徒であったころ、彼は、架空の手紙を書いて森鷗外を説得した。井伏には文豪の鷗外をも説得する「虚構」の手腕があった。

この作品において、朽助と「私」は別人であるが、井伏鱒二のなかに生息している朽助と「私」（東京の文学青年）とは、同一の人物と考えられる。朽助は「私」を受け入れ、「私」も朽助を信頼して、対話しながら思索を深めている。

そして、タエトは井伏の中に存在する希望（夢）であった。弾圧の吹き荒れる中で、「私」がタエトに近づくことは、避けなければならない。タエトの持っている「アメリカ風の考え方」は、国家の流れに逆行するものである。朽助の願いではあったけれども、この時局においては、表に出せない代物であった。朽助は、そのために「私」とタエトの間に「十字架」をおいて近づきすぎないように見張らせた。十字架は、朽助の自制心であったのだろう。この十字架は、さりげなくタエトと文学青年の「私」を見張る。しかし、二人の関係の断絶を求めるものではなかった。

- 7 堤防が完成し、池に水が張られる。このとき、朽助、「私」、タエトの三人は堤防の上から、一軒だ

け残っていた朽助の家を見ている。朽助は、すでにその家には住んでいなかった。水が朽助の家に入る。その様子を見て朽助はひどく嘆き苦しんだ。タエトの手が朽助の目をふさぐ。朽助も、自分で目をつぶった。池の水が朽助の家をすっかり飲み込んだとき、水没した家のあたりから、突然、天に向かって突き上げるように立ち上がる数本の柱が見えた。その浮力の強さを見て、朽助は言葉を吐いた。

「それは、いっそ咎（とが）ですが！ ああ私等はずらいですが！」

水面を突きあげて浮かび上がる柱は、朽助の心に湧き起った憤りとこらえきれない情念であったのだろう。朽助は、家を明け渡したけれども、時の役人に同調していたわけではない。「ああ私等はずらいですが！」という言葉の「私等」は、自分だけでないことを表している。朽助は、政府の認める工事〈思想の弾圧〉に対して譲歩せざるを得なかった。巨大な国家体制の圧力を全身で受け止め、歯を食いしばって踏ん張った。しかしながら、譲歩せざるを得なかったのである。井伏が変節したのではなかった。

8 池に水が満ちて、一杯になるころ、一羽の小鳥が水面をめがけて飛んで行った。小鳥は何度も水の上を探し回るように飛んだ。悲しい鳴き声を出して飛び回る小鳥に、朽助、「私」、タエトの三人は見入った。水没した谷間に、その小鳥の巣があったのだ。巣にはヒナが残されている。小鳥は、ヒナへの思いが断ち切れず、飛び回っている。けれども深くたえられた水の底の巣に、近づくことはできない。

小鳥の姿を見ていて、耐えられなくなったタエトは石を二つ、三つ拾った。そして声を掛けながら小鳥の方に投げた。それをきっかけに小鳥は彼方の林に入ってしまった。

この小鳥のヒナは、家を沈められた朽助の「魂」だった。その「魂」は、もともと朽助たちが持っていた言論や思想の自由であった。だが、それは大きな堤防によって、手の届かないところに沈められてしまった。朽助の目は、水面を見回すことしかできなかったのである。

■ 井伏鱒二の願い

井伏鱒二は、小林多喜二のように直情的に政府の弾圧に立ち向かうことをしなかった。自らの立場を「それは、いっそ咎（とが）ですが！ ああ私等はずらいですが！」というだけであった。井伏は自分の怒りや情念を、自らの中に封印した。しかし、朽助は「いっそ咎（とが）ですが！」と叫んでいる。「咎」の意味は、「非難されるべき過ち」ということである。朽助は「非難」の言葉を口にしてしている。そして、ここには、不可抗力の力を持って迫ってくる社会の弾圧の力学が明快に映し出されている。

井伏鱒二は、時代の流れに向かって、表面上は抵抗しない作家であったかもしれない。しかし、このように見てくると彼は自らの主義を転向することなく、生き方を変えることもしなかった。彼の信念は一貫している。

『朽助のいる谷間』と『山椒魚』を読むと、二つの作品には、当時の政府の「思想・信条」に対する弾圧がうかがえる。これが井伏を抑圧した正体である。すなわち、すでに述べた横山信幸のいう〈現実〉であった。その正体をさらに具体的にあげるならば「治安維持法」の制定、「特高警察」の創設などが考えられる。井伏鱒二とその時代の作家や思想家たちにとって、これこそが「岩屋」であり、「堤防」であった。こうした事実を、《物語》に偽装して井伏鱒二は無言の告発をしているのである。

このように考える時、二つの作品を書いた井伏鱒二のことを、先に挙げた「研究資料」にみたように、「かれは、自分のドラマを決して手掛けない……私を書かない私小説家」であるとか、「かれの作品には、環境をこえて自己を貫いてゆく、あざやかな個性といった存在はほとんど登場しない」と言ってしまうのだろうか。

井伏鱒二の文体には、その時代の中で書いてよいことと、書きたくても書けないこととが、ぎりぎりのところまで突き詰められ、追求されている。この瀬戸際の攻防の背景には、著者の優れた表現力と、時代批判の精神が渦巻いている。横山の指摘するように、井伏鱒二が弱々しい人格の持ち主とは言えないだろう。私たち読者は、井伏文学の「偽装」に目をうばわれて、託されている憤りと告発を見逃してはならないと思うのである。

井伏鱒二は、当時の人々に語りかけるだけでなく、後世の人々に対して、このような課題と取り組む

ことの重要性を伝えたかったのかもしれない。

内村鑑三が『後世への最大遺物』と題して、若い人々に講演したのは、明治27年であった。講演が、冊子となって流布したのは明治30年である。大正6年の秋に早稲田大学の予備門に編入している井伏鱒二（19歳）が、自らの生き方を模索していた青年であったとしたら、講演記録を読んだに違いない。

『後世への最大遺物』（岩波文庫・2016）には次のような言葉がある。

「将来までにわれわれの戦争（思想の上の闘い）を続ける考えから事業を筆と紙とに残して、そうしてこの世を終ろうというのが文学者の持っている Ambition であります。……われわれがわれわれの思想を筆と紙とにのこしてこれを将来に贈ることが実に文学者の事業であります」（p.44）

昭和の初期という時代の中であって、多感な青年期を過ごしていた井伏鱒二にとって、『朽助のいる谷間』や『山椒魚』は貴重な自己表現であったに違いない。彼は、内村鑑三に学んで、自らの思想を後世の人々に伝えたい Ambition を抱き、巧みなカムフラージュによってこの二つの作品を書き残したのではないだろうか。

(2018. 4. 10 記)

注

- 1) 『日本語の文体—文芸作品の表現をめぐって—』（岩波書店、1993）